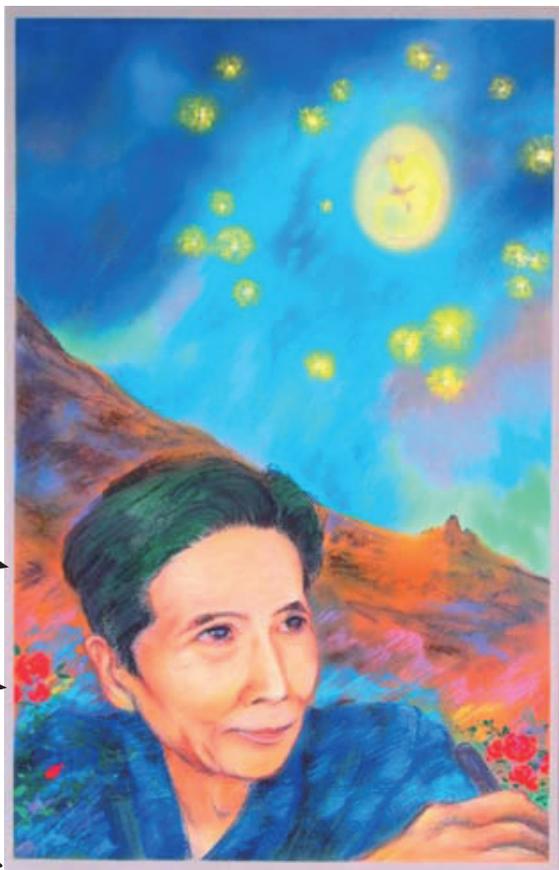


冬の谷間の記録

(3)



鈴木 与一

冬の谷間の記録（目）

鈴木 与一

第五章

殉教者とポロ雑布

三頁～一二六頁

第六章

霧の中から

一二七頁～二三二頁

第五章

殉教者とボロ雑布

駅前で約束の時間にまだかなりの余裕があるのを確認してから、賀来皓一は人々の往来で賑やかな駅前広場を横切り、喫茶店のドアを押しした。午後三時という時間帯のせいか、空席が目立った。彼は広場のみえる窓際の席を選んだ。——明日から都委員会中部地区委員としての生活が始まる、職業革命家として地下にもぐり、第一歩を踏み出すことになる。祝うべき日を、たとえ僅かな時間であろうと誰ひとり煩わされることなく、ひとり静かに過ごしたかった。

ウエイトレスは乱暴にコーヒー・カップを置いた。コーヒーがカップの中で踊り、勢い余ってすこしこぼれる。その音は賀来の胸に銃弾となって撃ちこまれた。もう少し静かに、出来ればひっそりと置いて貰えないだろうか——なぜなら彼は先程から、一つの決意の底に、疼くようにひろがる痛みを感じていたからである。一日も早い卒業を待ちのぞむ父と母、貧しい家族たち。賀来が学業を続けることによって起る負担を、黙々と耐えている、卒業の日に望みを繋いで……。いま彼は父の、母の、家族たちの期待に反した道へ決定的な第一歩を踏み出そうとしている。ふと、清田の父の、うつ向いた悲しげな顔が浮びあ

がった。

賀来は椅子に深々と体を沈め、眼を閉じた。新しいスタートを祝うにはまことに相応しくない、もの倦い音楽が流れている。自分の家族や清田の両親に、あなた達を決して裏切つてはいないのだと、誇らかに胸を張つて告げようとする時、隙間風のように、済まない思いとともに吹き抜けてゆく一種うしろめたいものがあつた。理論とは異つた、どろどろしたものがあつた。そしてそれは彼の氣持を悲しく沈みこませるのだ。賀来は静かに首を振つた。へ弱いな。考えがまだまだなつていない！　▽

ガラス窓の向う側をせわしなく人々が行き交う。ハチ公の銅像が記憶にぬれて建っている。銅像によじ登つて演説したり、いく度警官隊と衝突し、道玄坂を駆けあがつたことだろう。たかだかここ数年の出来事が、何んと遠い日のことであるかのように思い出されることだろう。きつと余りにも多くのことがあり過ぎたせいなのだと思つた。賀来は思つた。

冷えたコーヒをいっきに飲むと、賀来は店を出た。彼は駒場までのキップ

を求める。雪の凍みた夜、こごえた指で九円の貨幣を拾い集めた、出札口での屈辱にみちた記憶が鮮明に甦った。宇野の部屋の灯りを認めた時の、云い知れぬ崑び……。その彼の部屋に着いた賀来は、軽くノックをした。

「待ってたよ」と宇野の落着いた声が返ってくる。

小さなテーブルを挟んで、二人は向い合って坐った。実の兄弟よりも密接に、寄りそい、苦楽をともに過してきた数年。

「一時はずいぶん落ちこんだが、漸く党員も百名を越え、これからが楽しみだ」

しみじみとした口調で賀来が云った。

「皓さんがいなくなるので、心細いけど、頑張るよ」

珍しく微笑を浮べて宇野が云った。おや、と驚いた風に見つめる賀来の眼の前へ、宇野は紙袋から靴・鞆・コート・眼鏡・マフラー・皮手袋・何枚かのマスクを取り出した。

「凄いなあ」と思わず賀来は感嘆した。

「教職員のパルタイに呼びかけて、カンパして貰ったのさ。眼鏡は度のない素通しだから……。結構、品物は良いが、問題は合うかどうかだ。一寸つけてみてくれないか」

賀来は黙って立ちあがると、入口の狭い土間に立ち、ひとつひとつ身につけていった。靴はいくぶんきつく、コートはやや大き目だがぜいたくは云えない。眼鏡をかけ、右手に鞆を持つと、

「どう？」

照れくさそうに賀来は訊く。

「馬子にも衣裳というが、本当だ。だいぶ化けたよ。すっかり変った。あとは床屋へ行ってさっぱりした方がいいな。とに角、大成功だ」

しげしげと賀来を見上げ見下ろしながら、感に堪えたように宇野は云う。その顔に笑みが拡がり、心から嬉しそうだ。賀来はポケットに入れた右手を固く握りしめた。いま別れ、いつの日また会えるだろうか——その想念が賀来を捕えた時、胸が熱くなりほとんど泪ぐみそうになった。

「行ってみるよ。Sをたのむ」

彼は両足を踏ん張ると、熱い塊りを呑みこんだ。宇野は立ちあがると、額にかかる長い毛髪を掻きあげながら、賀来の前に立った。眼鏡の奥で目はいっぱいに見開かれ、キラキラと輝いているようにみえた。

「頼まれていた例の“やつ”」

二つ折りにした茶色の封筒を賀来に渡した。

「有難う。じゃあ」

賀来はふり仰いで宇野の眼を凝視めながら右手で強く握手するなり、身を翻してドアを押した。涙をみせないには、すでに限界であるのを彼は感じたのである。

「元気で！」

宇野の低いが叫ぶような声が、歩きはじめた賀来の背中を打った。

冬至を過ぎたとはいえ、夕闇の迫るのは早い。賀来は歩きながら宇野が最後に渡した封筒を取りだし、中から一枚の紙を引き抜いた。詳細な地図が書いて

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。